

『曾我物語』

軍記物語。作者不明。真名本、仮名本、大石寺本の3系統が伝わっている。真名本・仮名本は14世紀後半(南北朝期)、大石寺本は16世紀後半に成立したと考えられる。曾我兄弟の敵討ちに関して、その発端から後日談までの伝承を故事などをまじえて語る。

曾我十郎祐成(すけなり)・五郎時致(ときむね)の兄弟が、18年間の苦難に耐え、建久4年(1193)5月、富士野の狩場に父河津祐通(かわづすけみち)の敵である工藤祐経(くどうすけつね)を討ち、十郎は斬り死にをし、五郎は捕らえられて処刑された事件を筋の中心とする。物語は、兄弟の忍苦の生涯に、その母や十郎の愛人大磯宿の遊女虎の愛情物語を配したものであるが、背景として頼朝が鎌倉幕府体制を樹立する過程で、兄弟の祖父にあたる伊東祐親(すけちか)が頼朝と自分の娘との仲を裂き、頼朝の子を川へ沈めるなど、その怨恨の対象となるいきさつを述べて、曾我兄弟の仇討ちが私闘の域にとどまらず、將軍の仇敵の孫が寵臣を暗殺するという体制反逆の事件としての意味づけをしている。そのためこの事件は、仇討ちには成功しても兄弟は謀反人として生命を奪われざるをえないという悲劇的性格を有することとなり、それが逆に兄弟の復讐心の純粹さを保証することとなって、事件後出家した虎の純情さとあわせて、後世に人気を博する原因となった。もともとこの物語の原型は、忍苦の生涯を送った兄弟の怨霊を鎮魂するために在地で発想されたと考えられており、その性格は真名本に直接受け継がれている。もともと土俗信仰に結び付いて成立した物語(真名本)は瞽をうつ盲御前や、絵解法師の語り物として行われ、やがて京都にもたらされて物語(仮名本)として完成した。後世、謡曲・幸若舞・浄瑠璃・歌舞伎・各種草子などの「曾我物」と呼ばれる諸作品のもととなった。

[参考文献]

『曾我物語』, 日本大百科全書(ニッポニカ), 国史大辞典, JapanKnowledge, <http://japanknowledge.com>, (参照 2014-10-17)

曾我物語①

卷第五「三原野の御狩の事」

(源頼朝が三原野で狩りをしていると、雨が降り出す。梶原源太景季に歌を詠ませる。)

其の日午の刻に、また空にはかにくもり、神なりて、雨やうやうこぼれ、笠をうるほす。大将殿、景季をめして、「昨日、浅間野の雨は、さておきぬ。又、三原野の雨こそ、無念なれ。歌一首」とおほせくだされければ、源太うけ給て、とりあえず、

昨日こそあさまはふらめ今日はたゞみはらなきたまへ
夕立の神

と申ければ、鎌倉殿、御感のあまりに、碓氷の麓五百余町の所をぞたまはりける。なる神も、この歌にやめでたりけん、すなはち雨はれ、風やみければ、いよいよ源太が面目、これにはしかじとぞ、人々申あはれけり。

[参考文献]

曾我物語 日本古典文学大系88 / 市古貞次, 大島建彦校注 : 岩波書店, 1966.1 p. 204-205より引用 918/12/88B 2000105661